

憧憬・移植・実践 ——台湾新文学における中国白話文の導入に関する一考察——

劉 海燕

1. はじめに

日本統治下の1920年代に起こった台湾新文学運動は、その発展過程を見れば、中国の白話文¹の提唱から始まり、後に新文学理論の宣伝に至ったということが分かる。1917年、胡適らが起こした「文学革命」は、主に白話文の使用と伝統的形式主義の打破を主張した新文学運動であったが、しかし、それが台湾に導入される際には、白話文使用のみが取り入れられ、文学運動の面は切り離されてしまった。つまり、1923年に黄呈聡、黄朝琴が雑誌『台湾』で提唱した中国白話文は、実際には中国新文学から剥離され、新文学という器を抛棄したものであった。故に1924年、張我軍が『台湾民報』で中国新文学理論を紹介するまで、台湾における中国白話文は文学とは無縁であったと言えよう。中国新文学の影響下に誕生した台湾新文学は、白話文普及運動から新旧文学論争へと移行という二つの段階を経た結果、成立したのである。

そもそも新文学において重要な一部であった白話文は、台湾ではなぜ文学から遊離し、一時的に孤立した状態に置かれたのであろうか。従来の研究では、中国白話文の提唱は台湾の言語改革運動及び新文学運動の一環として扱われているが、中国白話文がいかんして台湾に導入され、最終的に新文学の使用言語となったのかという経緯については、未だ詳細な考察は行われていない。

そこで、本稿では、当時の台湾の青年たちが雑誌『台湾青年』（後の『台湾』及び『台湾民報』も含む）に発表した文学と関連ある文章の分析を通して、中国白話文の導入過程を考察し、それにより、以上に提起した問題について解決の方向を見出したい。さらに、中国新文学を手本とする過程において、台湾青年たちは、どのような意識を持って受容していたのかについても検討を試みる。

2. 中国白話文への憧憬——中国白話文の提唱に至る道

台湾新文学は、台湾近代民族運動から誕生したものである。1920年1月11日、「専ラ臺灣ノアヲユル革新スヘキ事項ヲ考究シ、文化ノ向上ヲ圖ルヲ以テ目的トス」²としていた新民会³は、東京で結成された。台湾近代民族運動はここから積極的に発展していくのである。同年7月16日、新民会の機関誌として雑誌『台湾青年』が東京において創刊された。『台湾青年』は日本統治期における台湾人留学生による最初の雑誌であり、その創刊は理想的には台湾新文学の始まりと見なされている。しかし、後の事実が証明しているように、ここから出発した台湾新文学が、本格的に新文学としての軌道に乗るまでの道のりは、意外と長かった。その途上に現れたのが、台湾人による白話文運動であった。

2.1 陳炯の「文学与職務」

台湾文化の向上という問題に関して、『台湾青年』は文学改革をいち早く提案している。1920年7月、慶応義塾大学の留学生であった陳炯は、『台湾青年』の創刊号で「文学与職務」を發表した。この一文において、陳炯は「文學者、乃文化之先驅也」と文学を位置付け、文学が有している「啓發文化、振興民族」という役割を指摘している。そして現在、一定の格式に束縛された台湾文学は、文学としての機能が發揮できず、白話文を用いる中国を鑑みて、「我郷言語中。有音無字者甚多。不可尽以文字音写之。然亦当期就言文一致体。不以法式文句。区々是執」と述べ、彼は台湾での「言文一致体」の実施を呼びかけている。

「文学与職務」において、陳炯は白話文を使用した中国新文学運動に賛成しており、台湾でも「言文一致体」を実施し、文学を改革しようという意図が窺える。しかし、陳炯のいう「我郷言語」は明らかに台湾語（主に閩南語）を指しているため、彼の「言文一致体」が、即ち中国白話文をそのまま台湾に将来することであったとは言い切れない。当時、台湾語は方言であり、口語として漢字では表現不可能であったので、「然亦当期就言文一致体」という陳炯の思いは矛盾していると感じざるを得ない。とはいえ、彼が「文学与職務」で表した文学理念は、胡適の文学に対する主張とほぼ一致していると言える。以下、両者の論述を比較対照すれば、それが明らかである。

【陳炯】夫情感者文學之靈。思想者文學之精。言文學者首當有真摯之感情高遠之思想。離此二者。而言文學。則如富加裝飾之木偶。難(雖)

有濃麗之外觀。而無靈魂腦筋(筋)。是為死文學。不能行其職務者也。

【胡適】情感者、文學之靈魂。文學而無情感、如人之無魂、木偶而已。行尸走肉而已……思想之在文學、猶腦筋之在人身……文學無此二物、便如無靈魂無腦筋之美人。雖有穠麗富厚之外觀,抑亦未矣。(胡適「文学改良芻義」における八つの事「一曰、須言之有物」からの引用)

これは陳炯が胡適に共感した上での記述なのか、あるいは共に期せずして同じ視点をもったのかは判断しがたいが、しかし彼の文学観及び「言文一致体」の文学改革観が、いずれも中国の「文学革命」に内包されているのは事実である。このことは、以後の台湾新文学の方向——中国新文学手本にするという方向を示していることは間違いない。かつて林瑞明も「陳炯的文学主張實與陳獨秀的革命文學輪如出一轍」⁴と指摘している。胡適らが主張した中国新文学は、陳炯の思い描く文学像の憧れであり、理想的文学への道を導く灯台でもあったと言えよう。しかし、陳炯の後継者たちは、しばらくの間、彼が示した道を歩むことができなかった。

早期に台湾の文学改革を呼びかけた陳炯は、結果としてその実践への道に踏み切ることはなかった。しかし、彼の「文学与職務」が、台湾新文学史上において重要な一席を占めていることは、疑うべくもない。そして、台湾知識人青年の代表として、初めて文学の意義を闡明し、また「文化の先駆である」文学の改革が、「諸般の革新の先導であり、急務である」と指し示したのは、陳炯であった。

陳炯に続き、文学を提起したのは、当時台湾総督府医学専門学校在学中の甘文芳である。彼の「実社会と文学」(『台湾青年』第3巻第3号、1921.9.15、原文は日本語)は、そのタイトルが示しているように、実社会と文学の関係を論じたものである。文学のための文学を批判し、実社会と密着した文学を主張した甘文芳は、現在の文学は「徒らに風流韻事なり茶前酒後の玩弄物」であると指摘する一方で、「民国に青年を中心とする新文化運動ありと聞く慶祝に堪へない事である」と中国新文化運動への関心を表している。「実社会と文学」は台湾新文学史上において、それほど注目されなかったが、早期に「文学」という命題を取り上げたことは、評価すべき点である。

2.2 陳端明の「日用文鼓吹論」

1922年1月10日、陳端明の「日用文鼓吹論」が雑誌『台湾青年』（第4巻第1号）に掲載された。「日用文鼓吹論」は、台湾における中国白話文運動の先駆けと言われている。

「日用文鼓吹論」において、陳端明は文章を「常文即日用文之類」と「文芸文即詩辭歌賦之類」の二つに分け、「日用文之目的在乎互相交換思想,以明白簡易為要」と主張し、今日の「徒倚浮華故典」の日用文を指摘している。そして、改革方法として、陳端明は「新用一種白文」と述べている。

在鄙人之見。即廢累代積弊。新用一種白文。使得表露真情。諒可除此弊。試觀現今所謂文明各國。多言文一致。唯台灣獨排之。此因承教於中華之後。故言文各異。然今之中國。豁然覺醒。久用白話文。以期言文一致。而我台灣之文人墨士。豈可袖手傍觀。使萬眾有意難伸乎。切望奮勇提唱。改革文學。以除此弊。俾可啓民智。豈不妙乎。白文之利。第一可以速普及文化。啓發智能。同達文明之域。第二意義簡易。又省時間。稚童亦能道信。自幼可養國民團結之觀念。其影響於國家不少。

上文より、陳端明のいう「白文」は「言文一致」を追求する文体であると推察できる。祖国であった中国でも、白話文を提唱し、言文一致を目指しているのであるから、台湾でも文言文襲用の弊害を取り除き、民の知能を啓発させるために、積極的に「白文」の提唱をしなければならないと陳端明は呼びかけている。では、陳端明のいう「白文」とは具体的にどのようなものであろうか。それは中国の白話文と見なすことができるであろうか。現在、「日用文鼓吹論」における陳端明は、中国白話文の提唱者であるという見方が主流となっている。

かつて趙遐秋は、陳端明の「日用文之目的在乎互相交換思想,以明白簡易為要」について、「这里的“日用文”是指与口语相应的书面语言,“简便”的“日用文”,自然是指正在大陆倡导的白话文了」⁵と指摘している。しかし、前述より、陳端明の「日用文」は、現在の一般的な口語に相応する書面語ではなく、「詩辭歌賦」以外の「常文」、即ち「互相交換思想,以明白簡易為要」のことである。そして、それを改革するために、彼は「白文」を提出したのである。よって、簡便な日用文とは即ち中国の白話文であるという趙の解釈は、明らかに誤読の結果であり、成立しないのである。また廖漢臣は、陳端明の「白文」に注目していたが、彼は陳端明が台湾で提唱しようとした「白文」と中国で用いられた「白話文」

という異なる表現に対して、前者が後者の略称であると安易に結論付けてしまった⁶。その判断は実証的ではなく、したがってそれに基づいた陳端明が中国白話文を採用しようとしたという結論は、根拠のないのに等しいと言える。

一方、李承機は、陳論文に現れた「白話文」という言葉は一回のみで、「白文」とは区別して使用されている。故に陳のいう「白文」とは、台湾民衆に適応し、台湾人の言文一致を実現する文体、つまり台湾白話文であるという可能性を示している、という⁷。確かに、「白話文」という言葉を用いず、わざわざそれと区別して、「言文一致」を目指す「白文」を取り上げた陳端明が、台湾白話文を提唱しようとしたのではないかという考えは無理とは言えない。

ところが、陳端明が「白文」という言葉を自分自身で解釈していたという事実が、これまで見落とされてきたのだ。「日用文鼓吹論」の文末で、陳端明は漢文を廃すべきではないと強調しつつ、「第以漢文浩瀚、如約而簡之、革為白文。使人々皆易學易知。具可以表其真意」と述べている。これによれば、陳端明が提唱した「白文」は、漢文（文言文）に基づき、その上で漢文を簡略化し、解りやすくした文章であることが分かる。つまり、「白文」は、中国白話文でもなく、台湾白話文でもない、「簡易な漢文」と考えられる。旧時の台湾人は「書房」で漢文を台湾語読みで習った。漢文は難しいのでより簡略化し、それを台湾語で読む。即ち「簡略化された漢文を台湾語で読む」というのが、陳端明がいう言文一致性を有する「白文」の実像ではないかと思われる。

いずれにしても、「日用文鼓吹論」における陳端明が、我々に示したかったのは、彼の「白文」の具体像ではなく、言文一致性を有する文体は、台湾民衆の文化普及に対して重要なので、必ずやそれを実現しなければならないという理念である。後に黄呈聡、黄朝琴がしっかりとこの理念を受け止め、言文一致性を用いた中国白話文を台湾に導入し始めたのである。この点においては、「日用文鼓吹論」は台湾における中国白話文運動の前兆であると言ってもよからう。

以上のことから、1923年に黄呈聡、黄朝琴が中国の白話文を提唱する以前に、中国の文学改革運動はすでに台湾知識人青年によって注目されていたことが推測できる。彼らには、近代化に立ち遅れていた台湾に、文化を普及させ、社会の進歩を促すためには、文学を改革しなければならないという現実認識があった。そこで、いかに文学を改革するのかについては、彼ら本来の祖国であり、また近代文学の成立を見た中国に見習い、「言文一致体」や「白文」の使用を考えたのだ。これらの考えは中国の「言文一致」の白話文とは異なっていたが、

しかし、いずれも中国新文学運動の衝撃の下で生まれたものと言えよう。1917年からの「文学革命」、特に1919年「五四運動」以降の運動は、確かに台湾知識人青年の文学改革に対する意欲に最も強く、最も直接的に刺激を与えたに違いない。しかしながら、「言文一致体」にしる、「白文」にしる、いずれも一時的に提案されたものであった。両者の提案が単なる提案に止まったのは、これらの内容そのものが曖昧であったこともその原因の一つであろう。また、何よりこれらの提案を行った彼ら自身の文章がいずれも漢文で書かれたものであったことから、両者の提案が机上の空論に過ぎなかったことが分かる。この時期の台湾青年たちは、文学改革への意識を持っていたが、更に前進して、実践への一歩を踏み切ることはなかった。結局、文学改革において最も重要である文体問題については解決することはできなかった。よって、雑誌『台湾青年』には新文学作品は一作掲載されず、継いで雑誌『台湾』の時代を迎えてしまうことになる。

3. 文化のための移植 — 文化の普及を目的とした中国白話文の導入

1921年10月17日、後に台湾民族運動の母体となる台湾文化協会が結成された。「台湾文化ノ発達ヲ助長スルヲ以テ目的ト為ス」⁸という趣旨を持った文化協会成立後、台湾島内の文化運動はしだいに盛んになっていく。1922年1月までに、文化協会の指導の下で、全島各地にたちまち8か所の「読報社」が設置された⁹。黄呈聡、黄朝琴の中国白話文提唱運動はこのような背景下で登場したのである。1923年1月1日、黄呈聡、黄朝琴は雑誌『台湾』（第4年第1号）にそれぞれ白話文で書かれた「論普及白話文的新使命」と「漢文改革論」を発表した。

1922年6月、当時早稲田大学の留学生であった黄呈聡と黄朝琴は中国を旅行した。中国の旅は、後に彼らが本格的に中国白話文を提唱する直接的な力となるのである。黄呈聡は「論普及白話文的新使命」において、「我今年六月有到過中国的地方、看過了這個白話文普及的狀況、一般得着利便很大、更加確實感覺有普及的必要」と述べている。この文章から、黄呈聡は、もともと白話文を普及しようという意識を持っており、中国各地を廻ってから、その決心をより一層強くしたと読み取れる。当時同行した黄朝琴も数年後の回憶録の中で似たようなことを述べている¹⁰。いかにして台湾の文化運動を前進させるか、常にこの問題を考えていた二人は中国への旅に出て、その解決方法を探そうとしてい

たに違いない。そこで、彼らの目に映った白話文運動に啓発させられて、そして台湾での白話文普及という意志を固め、本格的に白話文を宣伝し始めたのである。

黄呈聡は「論普及白話文的新使命」において、台湾文化が時代に遅れている原因は、民衆が容易に用いることができる文体がないことだと指摘し、現在の古文は難しく、上達するまで時間がかかると批判している。そこで、彼は胡適が記した白話文に関する歴史を台湾に紹介し、「中國民族的系統」である台湾で中国白話文を提唱する理由を示した。しかし、白話文を提唱すると同時に、中国と台湾の言語が異なっていることにも気づいていた。故に、黄呈聡は台湾語の入り混じった「折衷的白話文」を提案したのである。

「折衷的白話文」の使用は、黄呈聡によって完全な中国白話文使用実現までの一時的な方法であるとされたが、実際、台湾語を日常使用言語とする台湾では、「折衷的白話文」の使用は、中国白話文が導入される際に避けられない現象と言える。これについては、後の頼和、楊守愚などの漢文（中国語）作家の作品において台湾語がよく見られることから分かる。また、この現象は台湾新文学の一つの特徴であるとも言えよう。植民地であった台湾では、中国語白話文の使用では、本来の「言文一致」という目標を達することができなかった。その原因としては、台湾における日常用語が台湾語であること以外に、日本語を「国語」とする植民地教育制度の存在が挙げられる。それにもかかわらず、黄呈聡は「中國是母我們是子」という文化観の下で、中国の白話文を提唱し、台湾における文化の普及、更には台湾社会の革新を目指し、中国との連帯をも求めたのである。

黄朝琴は黄呈聡と同様に、勉強し難く、時代に遅れている現在の漢文を批判し、「本家的中国」で流行していた白話文を習い、台湾文化を高める意志を「漢文改革論」で表している。台湾で白話文を普及させるのかについて、黄朝琴は黄呈聡のように白話文で書かれた中国の書籍を読ませることと公学校（台湾人向けの小学校）で漢文の代わりに白話文を教えることという二つの方法以外に、「台湾白話文講習会」の設立を提案している。黄朝琴の「台湾白話文講習会」は文字を全く知らない民衆を対象としており、徹底的に台湾で白話文を普及しようとする彼の決心が表れている。後に、黄朝琴は『朝琴回憶録』中において、自ら白話文を使用し、それを宣伝する意図について以下のように語っている¹¹。

我的用意是希望臺灣同胞相互間、均能使用中國文字、使白話文逐漸普及、這樣不僅中華文化在臺灣得以繼續保存、而且因簡單易學的白話文的推廣而能發揚光大、藉以加強民族意識。間接的、使日本對臺灣的日文同化教育、無法發揮他預期的效果。

上述の内容から、黄呈聡、黄朝琴の中国白話文の提唱は、台湾に文化を普及させるためであり、また、当時の台湾知識人青年を祖国中国と結びつけるためのかけ橋にしようとしたことが推察できる。この点に関しては、若林正丈はかつて「コインの両面の如く」¹²と指摘している。

1923年、黄呈聡、黄朝琴が本格的に中国白話文を提唱し始めた。彼らが提唱した中国白話文は、最終的には台湾新文学の使用言語とはなったが、その提唱は、決して台湾で新しい文学を作るためではなかった。このことは王育徳も指摘している¹³。黄呈聡らの提唱する白話文普及の新たな使命とは、文化普及という大きな目的に照準を拡大したものであったと考えられる。1922年、中国を視察した黄呈聡、黄朝琴は、勢い盛んな新文学運動を感じ取っていたはずである。だが、遅れていた台湾文化をいかに早く向上させるのかという念頭の下に、彼らは文学には言及せず、分かりやすい文体として白話文のみを導入したのである。同時期の台湾において、白話文の試作が発表されていたのだが（例、無知「神秘的自制島」、『台湾』第4年第3号、1923.3.10）、それはまだ本格的な新文学の誕生とは言えず、台湾新文学の本格的な始動は、新文学の創造を目的として張我軍が引き起こした新旧文学の論争を待たなければならなかった。

4. 文学における実践 —— 文化普及の道具から文学使用言語としての白話文へ

1923年4月15日、台湾雑誌社によって『台湾民報』（以下『民報』）が創刊された。『民報』の創刊は、雑誌『台湾』における白話文の提唱を理論から実践に至らせたと言えよう。

『民報』の「創刊詞」には「専用平易的漢文、満載民衆的智識、宗旨不外欲啓發我島的文化、振起同胞的元氣、以謀臺灣的幸福、求東洋的和平而已」と書かれており、平易な漢文を用い、台湾文化を高めようという趣旨が表れている。ここで、「白話文」ではなく「平易な漢文」を主張することは、黄呈聡の「折衷的白話文」と同様に、完全な白話文実現のための一時的な方便であったと考えられる。実際、『民報』の編集者たちの真の目的は白話文を普及することにあった。それは、創刊号の『民報』に「研究白話文的討論」という論題や、白話文

を習う際の良書の紹介や、「台湾白話文研究会」の設立に関する記事などが掲載されており、その内容から理解できる。

『民報』の創刊号は、編集者たちが一日も早く白話文を普及させようというせっぱ詰った気持ちに溢れている。そのような最中に、中国白話文の提唱者である胡適の作品が転載され始めた。その第一編は彼の唯一の戯曲「終身大事」である。胡適の「終身大事」は、中国新文学において初めて白話文で創作された戯曲であり、中国現代劇の「里程碑」と称されている。その内容は若い女性の反封建、反家父長制の意思を反映しており、発表後はたちまち全国に広まり、強い反響を起こした。戯曲「終身大事」は、後に台湾でも上演され、好評を博した。『朝琴回憶録』によれば¹⁴、胡適の『終身大事』は主に白話文の手本として転載されていたことが分かる。また、この転載は『民報』編集者たちが中国新文学を宣伝しようとした意図も含まれている。後に転載された胡適の作品には「最後一課」(第3号、1923.5.15)、「李超傳」(第4号、1923.7.15)、新詩3首(第6号、1923.8.15)、「百愁門」(第15号、1924.1.1)と「二漁夫」(第17号、1924.2.21)がある。1925年1月1日、魯迅の「鴨的喜劇」が転載されるまで、『民報』に現れた中国新文学の作品は胡適の作品のみであった。黄朝琴らによる胡適の作品の転載は、いずれも「終身大事」のように、台湾新文学を成立させるためではなく、主に白話文を宣伝するという目的であったと思われる。なぜなら、もし新文学を作る意志があったならば、理論家胡適の作品のみではなく、もっと多くの新文学作家の作品を紹介したに相違ない。これを裏づけるものとして、1925年に『民報』の編集者になった張我軍が、積極的に魯迅、郭沫若などの中国新文学作家の作品を転載していたことが挙げられる。

白話文の見本として胡適の作品が転載されている一方で、1924年11月、張我軍の「糟糕的台湾文学界」(第38号)が発表されるまでの間は、台湾の青年による白話文での文芸作品も次々と『民報』に掲載された。これらの作品の題材を見ると、小説、詩、劇、児童文学、散文、随筆、翻訳作品など全てのジャンルが現れている。特に小説、新詩の数が多し。また作者の数も多く、その中で現在知られているのは、翁澤生、施文杞(涙子)、張我軍(一郎)、楊雲萍(雲萍生)、張梗、謝星楼(鷺江TS)である。これは、1925年1月1日、魯迅の「鴨的喜劇」(第41号)の転載から、1926年1月1日頼和の小説「鬪鬪熱」(第67号)の発表までの丸一年間、台湾人による小説が一編も見当たらなかったという状況とは対照的である。しかし、新旧文学論争が始まる前に現れたこれらの

台湾人の作品は、新文学を完成させるための試作であるとは明確に言い切れない。これらの作品はむしろ白話文訓練のための文章試作と言った方が適切であろう。

このような状況と並行して、『民報』には中国新文学の紹介や論述も現れた。秀湖（蔡孝乾）の「中国新文学運動的過去現在和将来」（第4号、1923.7.15）及び蘇維霖の「二十年来的中国古文学及文学革命的略述」（第24号、1924.6.11）においては、いずれも胡適の文学理論が喧伝されており、同時に陳炯明以来の文学改革の意識が台湾に再び現れた。『民報』第14号（1923.12.21）に発表された潤徽生の「論文学」は、白話文で書かれ、旧文学に反対し、新文学を作るべきだという意志が表れている。その後、張梗は「討論旧小説的的改革問題」（第31-37号）において、台湾で文芸運動を起こそうと更なる呼びかけを行っている。その内容は、以下のようなものである。

旧小説的進途已迫到無可如何的今日了。隔着一衣帶水的中国早已出了許多的学者出来極力痛論提唱改革。面目一新。已非昔日。而獨我們台灣居然猶是祖下傳來那樣的固陋難堪。不、不、我還是有些過獎。平心而論、台灣那裡有小說之可言。不過是那些中國流來的施公案彭公案罷了。我想我們台灣人苟自居為文化人、爭並肩而立於二十世紀的地球上、為什麼竟不要求小説的發達?已會政治運動為何文藝這方面竟忘掉了?而這些文化運動却不籍文藝方面的扶助而圖成長。……

我並不是膽大說我所論皆是。所以我希望人々出来对舊文藝述一述意見。多一个人出来吐露釀成改造的機運了。

1924年8月1日、張梗が白話文で創作した戯曲「屈原」が『民報』に発表された。「屈原」は台湾における最初の戯曲と言える。「討論旧小説的的改革問題」においては、張梗は旧小説の改革を通して、文芸運動を起こそうとしていたことが読み取れる。また、文芸運動により、文化運動を促進させるという目的も窺える。旧小説の欠点を批判するにあたり、張梗は胡適の「建設的文学革命論」¹⁵を引用している。このことから、後の張我軍が胡適の文学理論を用い、台湾新文学を作ろうという行動を起こす前に、すでに張梗により新文学運動が提唱されていたことが分かる。

黄呈聡、黄朝琴らは文化普及のために、胡適が提唱した白話文を台湾に導入し、白話文を普及させるために、胡適の白話作品を転載し始めた。これと同時に、台湾人による白話文の作品も次々と発表された。このような状況に伴い、

台湾で文学改革の風潮が再現し、そこで胡適の文学理論が紹介されたことにより、台湾知識人青年たちは文芸運動の隆盛が文化運動をも促進させるという文学本来の使命に目覚め始めた。陳炯が最初に提唱した文学革命をようやく蘇らせ、彼らはその実践への道に踏み入ろうとしていたのである。

5. 結びにかえて

以上、台湾新文学における中国白話文の導入過程について考察してきた。最初に文学改革の見本として言及された中国白話文は、後に台湾に本格的に導入される際に、文学改革のためではなく、文化普及の道具として扱われた。そして、白話文普及のために、中国白話文の提唱者であった胡適の作品が『民報』に転載され始めた。胡適の作品は主に白話文の見本とされているが、実際には、これらの転載は中国新文学の喧伝にもなっているのである。この転載により、台湾での中国白話文の導入が、最終的には中国新文学と結びつくと考えられる。胡適の作品の転載に伴い、台湾人による白話文の作品が次々と『民報』に発表されるようになった。これらの作品の掲載が、台湾新文学の使用言語を中国白話文に定着させることになったと言えるであろう。したがって、中国白話文の定着は、張我軍の新旧文学論争が始まる前に、すでに実現されていたのである。

陳炯、陳端明の文学改革の意図は、文化を促進させるためであった。彼らの「言文一致体」の文学改革理念は、必ずしも中国の「文学革命」を受容したものとは言えない。しかし、両者の文学改革の構図においては、かつての祖国であった中国の「言文一致体」——白話文は、彼らの文学改革方案の根拠となったのであるが、現実的には、台湾語を表記する文字が整っていないため、陳炯、陳端明の「言文一致体」は、ただ曖昧模糊の概念に終わってしまった。彼らにとっては、中国の白話文はその文学改革理念における単なる「参考」となるのみであった。この時期、中国の新文学は台湾知識人青年にとっては、まだ彼岸を遠望し、憧憬の的ではあったが、中国の白話文を台湾に将来し、台湾で同じ文学革命を起こそうとする意図は明確には見出せなかった。陳炯、陳端明の文学改革理念が結局広まらなかった原因は、廖漢臣が挙げた二点¹⁶以外に、もともと彼らが文学青年ではなかったことと、また、台湾新文化運動がまだ発足したばかりで、文化を促進させるルートを模索している最中の台湾青年たちが、文化啓蒙における文学の重要性をそれほど意識していなかったことも挙げられ

よう。

1923年に黄呈聡、黄朝琴が提唱した中国白話文は、確かに完全な「拿来主義」（丸写し主義）である。即ち中国の白話文をそのまま台湾に移植することであった。台湾文化を向上させるという出発点において、両者は陳炳、陳端明と異なり、台湾に中国白話文を導入することを選んだ。彼らはすぐに完全な白話文を実現することができないという現実を認めつつ、中国と同じ文化を根幹に持っているということで、台湾でも白話文は根を下ろせることを確信した。日本統治下の台湾における中国白話文の提唱は、実に両面性を持つものであった。表は台湾文化を普及させるためであるが、裏は中国との連帯を求め、植民地統治に抵抗する手段でもあった。これは文化協会成立後に、活発となった台湾民族運動に呼応していったのである。「文学革命」に伴って提唱された中国白話文は、台湾に導入される際に文学そのものから乖離させられ、単に文化普及の道具と見なされてしまった。その結果として、封建文化の象徴である旧文学がまだ依然として勢力を温存したのである。実際、これらの白話文提唱者は、新文化運動の提唱者であったが、新文学の創造者ではなかった。この状況は、中国で新文化運動の提唱者が即ち新文学の創造者でもあったということとは大きく異なっている。1923年の中国白話文の提唱では、陳炳の文学改革の主張は蘇ることはなかったが、『民報』における胡適の文学作品の転載及び中国新文学に関する紹介は、後に中国新文学理論の登場の前哨となっていたに違いない。また、その白話文での文芸作品の掲載によって、台湾新文学の使用言語は中国白話文に定着することとなり、かつ台湾新文学の下地となったと考えられる。

本稿では、台湾新文学運動における中国白話文の導入過程を「憧憬」「移植」「実践」という3つの段階に分けて分析した。また、従来では異議のある問題、例えば陳端明の「白文」についても論じた。しかし、次の2点：(1) 中国白話文の導入過程において、台湾議会設置請願運動、台湾文化協会などの複雑な社会運動がどのような影響を与えているのか、(2) 中国白話文を通して、文化普及（封建習俗の打破や民族自決など）がどのように実現するかについては、紙幅の制限のため、本稿では詳細に考察することができなかった。いずれも今後の課題とする。

※ 本稿は、2008年6月1日の日本台湾学会第10回学術大会にて、口頭発表したものに大幅な加筆修正を行ったものである。

注

- 1 本稿における中国白話文とは、清朝末期以来の白話文運動をベースとして、後に胡適らにより理論化されたものを指している。それは、日本統治期の1920年代に誕生した台湾新文学は、1917年の胡適「文学改良芻議」の発表から始まった中国文学革命の後に現れたものであり、また、台湾新文学初期の白話文に関する文章からも読み取れる。
- 2 『台湾総督府警察沿革誌Ⅲ<台湾総督府警察沿革誌第二編 領台以後の治安状況（中巻）台湾社会運動史>』、台湾総督府警務局、龍溪書舎、1973年5月31日（復刻版）、第25頁。1939（昭和14）年7月28日初版発行。
- 3 1919年末に東京の台湾人留学生を中心に「啓発会」が組織された。会長は林献堂、幹事は林呈禄、その他主な会員に蔡培火・王敏川・黄周・呉三連がいた。しかし、明確な主旨と組織がなかったために自然解消し、20年1月11日新たに蔡惠如が台湾文化の向上を目的に、「啓発会」の成員を再結集して「新民会」を作った。
- 4 林瑞明『台湾文学的歴史考察』、允晨文化、2001年5月、第5頁。
- 5 呂正恵・趙遐秋主編『台湾新文学思潮』、崑崙出版社、2002年1月、第28頁。
- 6 廖漢臣「台湾文字改革運動史略」、李南衡編『日据下台湾新文学文献資料選集』明集5、明潭出版社、1979年3月、第461頁。
- 7 李承機「殖民地台湾媒體使用語言的重層構造——<民族主義>與<近代性>的分裂」、若林正文・呉密察編集『跨界的台湾史研究與東亞史的交錯』、播種者文化有限公司、2004年4月、第217頁。
- 8 同注2、第140頁。
- 9 同注2、第148頁。
- 10 黄朝琴『朝琴回憶録』、龍文出版社、2001年5月、第15頁。
- 11 同注10、第17頁。
- 12 若林正文『台湾抗日運動史研究』（増補版）、研文出版、2001年6月1日、第232頁。原文：「日本統治下の台湾に普及さるべき中国白話文の「新使命」には、コインの両面の如く、二つの側面があることになろう。ひとつは、これによって民衆の啓蒙に資し台湾を改造して、台湾を「世界の台湾」たらしめることであり、もうひとつは、これによって革新しつつある「祖国」と連絡し、このことによって台湾の民族文化を保衛することであった」。
- 13 王育徳「文学革命の台湾に及ぼせる影響」、『日本中国学会報』第11集、1959年、第145-154頁。
- 14 同注10、第18頁。
- 15 胡適「建設的文学革命論——国語的文学 文学的国語」、『新青年』、第4巻第4号、1918年4月15日。
- 16 同注6。